

オンライン環境における協同学習の実践

■ 俣野 秀典 (高知大学 地域協働学部)

キーワード オンライン授業、協同学習、LTD、話し合い学習法、ZOOM、Miro

1. はじめに

主体的・対話的で深い学びを Web 上でいかに実現するか。オンライン授業の活動性をどのように高めるか。ここ数年、学生主体の学びを志向する教育関係者が直面している課題である。

本稿では、アクティブラーニングの基礎理論と位置づけられている「協同学習」を中心に扱いながら、その技法がどのようにオンライン授業で展開されているのかを報告する。

2. 協同学習の要件

Johnson らは、協同学習に望ましい条件として、

- ① 互恵的な協力関係がある
- ② 個人の責任がある
- ③ 対面しての促進的な相互交流がある
- ④ 社会的スキルの訓練・活用がある
- ⑤ 活動に関する振り返りの時間がある

を挙げている (Johnson et al., 1991)。また Kagan は、以下の 4 条件を満たす場合のみ協同学習と呼んでいる (Kagan, 1994)。

- ① 互恵的な協力関係がある
- ② 個人の責任がある
- ③ 参加の平等性が確保されている
- ④ 活動の同時性に配慮されている

アクティブラーニングで多く用いられるペアやグループでの活動が、参加者すべての学びになるように設計されているかは、これらの条件がおさえられているかどうかで判断できる (俣野, 2018)。

3. 学生の反応

筆者は2010年より本格的な協同学習の考え方を反映させた授業・学習活動づくりに取り組んできている。本稿で取り上げる 2 種類の授業(「質的調査法」「経営組織論」)では、89%の学生がシラバスに示された到達目標を達成できたと自己評価している (2020年度と2021年度の平均値)。協同学習を用いたこれらのオンライン授業の受講生からの声の一部をここに転載する。

[授業全般について]

- 適切な資料の配布、読んで考えてまとめる課題、それをシェアすること。この三つで頭に入ってきやすい
- 自分の考えを少人数のグループの中で何度も共有することで、自分が何を理解できていて、何を理解できていないのかを確認できる

[授業中の対話について]

- ほかの人と話せることで意欲が出る
- コミュニケーションが取りやすく相手の意見も素直に聞けた
- 話しあいをする際に時間配分も意識するようになった
- 対面形式が実現できなければ、リアルタイムのオンライン授業を続けていくべきだと感じた

[授業の工夫について]

- 学びやすい環境を整備してくださっている
- Miroを使った課題を出すなど、授業外でもグループと関わる学びの場を提供している
- この授業はほとんど先生の説明を聞く時間はなく、自分の頭を使い、話すことが多いので1時間半があっという間に感じる
- ZOOMを一番使いこなして授業を行なっている先生

[協同的な学びについて]

- グループワーク自体が、真剣にやらなければという意欲を引き出してくれている
- 自分の視野が広がることで、新たな発見ができる
- 自分自身の学びが周囲との関係性によってつくられると思うと、意欲的に取り組める
- 取り残される人がないようにしていたと感じる
- 安心して授業を受けられた
- 予習をすることによって、授業での理解度が大幅に変わることを知れた
- 回を追うごとに授業への理解や好奇心が増加していった体験となりました

4. 授業名と技法名

授業全体を通して協同的な学びを意図した設計となっている。実践報告でもある本稿では、その中で展開された三つの技法に焦点を当てる。

「質的調査法」は大学1年生20～50名が主な受講対象者で、「ジグソー」「プレゼンテーション」を取り上げる。2年生以上10～30名が履修する「経営組織論」からは「LTD」を詳しく取り上げる。

どちらも完全オンライン（リアルタイム）での実施形態で、使用ツールは「Zoom」「Zoom Whiteboard」「Google Document」「Miro」である。Zoomでは、「画面共有」「ブレイクアウトルーム」が主に活用された。

5. ジグソーとプレゼンテーション

協同学習の古典的な技法であるジグソーは、おおよそ以下のような流れで実施される。

- ① 一つのテーマに関わる課題が複数パートに分割される
- ② 各自が1課題を担当する
- ③ 課題別のグループ（専門家集団）で内容を確認する
- ④ もとのグループで総合化する

本授業では、四つに分割された課題（学習内容）の一つを各自が予習してきて、授業時間内にブレイクアウトルームを用いて、同じパートを担当した他のメンバーと内容を確認しあった後、もとのグループに戻ってきて、自分の担当パートをメンバーに教えるという流れで実施された。

その上で、オンラインホワイトボード「Miro」上に学習内容をまとめたポスターを授業時間外に作成する活動に移行された。

翌週に、そのポスターを用いたプレゼンテーションが実施された。協同学習の技法である「特派員（お出かけバズ）」を応用した筆者オリジナルの「クラス内同時プレゼン」の方法が採用され、以下の構成で数セット行われた。

- ① 1～2名が残って、他グループからの聴衆を受け入れる
- ② プレゼンテーション、質疑応答、意見交換を行う

学生の学習活動からこれまでの流れをまとめると以下ようになる。

- a. ホームグループ（4～5名）が決定する

- b. 自分が担当するパートが決定する
- c. 自分のパート（約24頁）を読み込む（授業時間外）
- d. 確認シートを用いて、同じパート担当者同士で理解を確認しあう
- e. ホームグループのメンバーに自分のパートの内容を教える
- f. 全員分の内容をふまえたポスターをグループで作成する（授業時間外）
- g. 作成したポスターを用いてプレゼンテーションする（1回）、他グループに聞きに行きに行く（数回）

6. LTD

「経営組織論」は、おおよそ「組織論の基礎 → 知識ベース組織論 → 組織分析」の流れで授業が構成されている。経営学の知識はほぼ無いものの、実習の体感覚・実体験がある2年生以上が主な履修者である。ここでは中盤の知識ベース組織論を理解する段階で用いられた技法を取り上げる。

LTD (Learning Through Discussion) は、Hill (1962) が提唱し、Rabow ら (1994)・安永 (2006) 等に継承された技法で、予習（個人思考）＋ミーティング（集団思考）で構成されている。予習に加えて、授業中の話し合い（ミーティングと呼ばれる）において、課題文で用いられる用語の理解・主張や話題の理解・既存知識や経験との関連づけ・課題文の評価などを、仲間とともに進めていくところに特徴がある。

メンバーとの話し合いを通して深く多面的に課題文を理解していく LTD をオンラインで見学された授業参観者からは、以下のようなコメントをもらっている（FD・SD ウィークでのコメントより）。

- 課題本を通して学生が自分の実習について対話するところが特に印象的でした
- 分厚い本を学生が「ちゃんと」読むのかという疑問を参観当初は持っていましたが授業の雰囲気や学習形態によって、「読まなければならない」空気感があって、分厚い本にきちんと向き合っていることがよく分かりました

- 対話させるまでの過程の重要性に気づかされました
- 教材を読んで自分事としていく仕掛けを採り入れてみたいです
- 学生にアウトプットさせることを中心に授業を組み立てていることが印象的でした

先述のように、本授業の序盤では組織論の基礎を扱っている。授業時間外の学習時間は以下の通りであった（5週目アンケートの結果を転載）。

Q. 毎回の予習（テキストの精読、用語の確認、振り返りシートなど）に、どの程度の時間をかけていますか？

A. 2時間以上 71%

Q. 報告担当回の準備（ハンドアウトの作成など）に、どの程度の時間をかけていますか？

A. 2時間以上 91%（2～3週に1回のペース）

LTD を用いた中盤では、1週間に70～120ページ（1～2章分）のペースで読んでいき、1カ月で読み終えるスケジュールで進められた。

受講生は準備ノート（LTD では一般的に予習ノートと呼ばれている）の説明（作り方と例示）を授業第8回の終盤に受け、授業前日までにLMSに提出して、当日を迎える。なお、準備ノートは各自でプリントアウトして手元に用意することとした。

準備ノートは以下の構成が採用された。なお、本来のLTDでは関連づけが2種類に分けられているが、時間の節約、知識の不足、課題図書に性質に加えて、実習の経験と関連づけをさせたい意図を反映させて一つのステップに集約している。

Step 1：全体像の把握

Step 2：言葉の理解

Step 3：主張の理解

Step 4：話題の理解

Step 5：知識との関連づけ

Step 6：課題文の評価

ミーティング初回となる第9回では、ステップごとに目的と方法の解説が挟み込まれ、時間的にも余裕をもって進められた。筆者は各グループの様子を観察し、必要であれば、具体例を交えながら、ステップの進め方についてのフィードバックをクラス全体に行っていた。ミーティングの流れは以下の通りである。

- Step 1 : あいさつ (3分間)
- Step 2 : 言葉の理解 (6分間)
- Step 3 : 主張の理解 (6分間)
- Step 4 : 話題の理解 (12分間)
- Step 5 : 知識との関連づけ (15分間)
- Step 6 : 課題文の評価 (3分間)
- Step 7 : 振り返り (6分間)

以下は2回分のミーティングを1回の授業で行うためにLTDを筆者がアレンジした授業モデルである。90分(84分+a)の大学の授業に適応させており、学習者が慣れればこの流れで進めることが可能である。

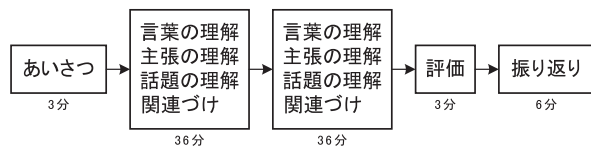


図1 90分で2回分のLTD授業モデル

- LTDを体験した学生の声の一部をここに転載する。
- 他者の価値観に触れる事やその思考プロセスを探る事ができた
 - 回を追うごとに授業への理解や好奇心が増加していった体験となりました
 - 留学や会社設立などの経験を聞き、私も何か挑戦してみようという気持ちになった
 - 読書は新たな知識や考え方など学べる素晴らしい学習法だと感じた
 - 自分1人では理解できないことも、他の人の話を聞くことで理解できることが分かった
 - 関連づけでは、自分とは異なる経験をしてきた人の

関連づけを聞くことで、テキストからわかることの幅がより広がった

○議論の進め方や話し方等も試行錯誤する事ができた

7. おわりに

本稿では、オンライン環境においても一方通行にならない授業づくりの実践として、筆者が担当する二つの授業を取り上げた。後半では、大学の1コマの授業に対応した「90分で2回分のLTD授業モデル」を提示した。

本モデルは、1回分のミーティングでは時間が余る90分の授業において、それほど効果を落とさずに、より効率的に実施するための指針となりうる。実践を蓄積することによって、モデルの汎用性を高めていくことが今後の課題である。

【参考文献】

- Johnson, D. W., Johnson, R. T. & Smith, K. A. (1991) *Active Learning: Cooperation in the College Classroom*. Edina, MI: Interaction Book Company (関田一彦監訳『学生参加型の大学授業』玉川大学出版部, 2001).
- Kagan, S. (1994) *Cooperative Learning*. San Clemente, CA: Kagan Publishing.
- 侯野秀典(2018)「目標標準型ファシリテーションの導入法」中園篤典・谷川裕稔編『アクティブラーニング批判的入門』55-64, ナカニシヤ出版.
- Rabow, J., Charness, M. A., Kipperman, J. & Radcliffe-Vasile, S. (1994) *William Fawcett Hill's Learning Through Discussion 3rd Edition*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications (丸野俊一・安永悟訳『討論で学習を深めるには』ナカニシヤ出版, 1996).
- 安永悟(2006)『実践・LTD話し合い学習法』ナカニシヤ出版.